

## 原著論文

## 夏季研修における体験活動に関する取り組み：

## 学生の学びに関する検討

Studies on Learning through Experiences  
in Freshman Summer School Program

土橋 久美子 (白百合女子大学) ・ 宮下 孝広 (白百合女子大学)  
Kumiko Dobashi (Shirayuri University) Takahiro Miyasita (Shirayuri University)

石沢 順子 (白百合女子大学) ・ 椎橋 げんき (白百合女子大学)  
Junko Ishizawa (Shirayuri University) Genki Shiihasi (Shirayuri University)

神永 典郎 (白百合女子大学) ・ 曾我部 和広 (白百合女子大学)  
Norio Kaminaga (Shirayuri University) Kazuhiro Sogabe (Shirayuri University)

・ 目良 秋子 (白百合女子大学)  
Akiko Mera (Shirayuri University)

近年、学校教育における体験活動の意義が取り上げられ、子どもたちの体験の不足、特に自然体験不足の現状が明らかになっている。2020（平成32）年度実施の学習指導要領においても、体験学習の充実が明記され、自然の中での集団宿泊体験などを重視することが盛り込まれている。白百合女子大学人間総合学部初等教育学科では、教員・保育者の資質向上を目指す上で必要な多様な体験を積むことができるよう、1年生を対象に2泊3日の宿泊研修を毎年実施している。本稿では、夏季研修での活動においての学生の学びを整理し、学生アンケートから「満足感」について分析する。そして、夏季研修で行われる様々な体験活動から学生が何を学び、それが学生自身の「学びに向かう力」の向上、そして教員・保育者の資質向上にどのようにつながるのかを検証した。その結果、それぞれの体験活動の課題が見えてきたほか、学生自身の学びの中に教員・保育者の役割についての視点が意識化され、主体的に取り組む学生自身に満足感があることなどを捉えることができた。

## 1. はじめに

近年、学校教育における体験活動の意義が取り上げられており<sup>1)</sup>、2012（平成24）年度調査の「青少年の体験活動などに関する実態調査」報告書からも子どもたちの体験の不足、特に自然体験不足の現状が明らかになっている<sup>2)</sup>。2008（平成20）年3月公示の小学校学習指導要領では、集団宿泊活動や自然体験活動などを推進する姿勢が強く打ち出され、2010（平成22）年以降国立青少年教育振興機構では「体験の風をおこそう」運動を推進し、体験活動が生きる力をはぐくむことや長期集団宿泊活動のすすめなど、社会全体での体験活動の必要性を発信している。2020（平成32）年度実施の学習指導要領においても体験学習の充実が明記され、自然の中での集団宿泊体験などを重視することが盛り込まれている。幼児、児童の体験活動を支えるためには、社会全体での取り組みも重要であるが、教育・保育現場を支える教員、保育者自身の体験も欠かせない。近年は幅広い生活体験や自然体験を十分に積むことなく教員等になっている場合も見られるという問題点が挙げられ<sup>3)</sup>、幼稚園教員の資質向上についての報告書でも養成の段階での多様な体験の確保が課題となっている<sup>4)</sup>。

白百合女子大学人間総合学部初等教育学科（以下「本学」と記載）では、教員・保育者を目指す1年生75名を

対象に、教員・保育者の資質向上を目指す上で必要な多様な体験を積むことができるよう、宿泊研修を2016（平成28）年度より本学教員が計画し、実施している。本稿では、この研修での活動時の様子や研修の記録から学生の学びを整理し、学生アンケートをもとに「満足感」についても分析する。そして、夏季研修で行われる様々な体験活動から学生が何を学び、学生自身の「学びに向かう力」の向上、そして教員・保育者の資質向上にどのようにつながるのかを検討した。

## 2. 夏季研修取り組みの意図

夏季研修実施当初から、本学教員が学生たちに強調していたのは、視点を参加者（子ども）側から教員・保育者の側に移すということであった。教員・保育者を目指して入学し、1年前期の講義で専門的な養成カリキュラムに従って学び始めたとはいえ、まだまだ学生たちは高校までの延長線上にあり、当たり前のことではあるが、教育を受ける立場、言い換えれば子どもの立場から抜け出すことはできていない所が見受けられる。保育における様々な活動や、学校における授業において、子どもが主体として活動できるように企図して、教員や保育者が何をしているのか。つまり、どんな活動や授業であれ事前に周到な準備がなされていること、しかし活動の場においては、そのことを子どもに感じさせず、場合によっては準備したことを惜しげもなく捨てる場合もある。そして、臨機応変に子どもの学習過程に合わせていくことも含めて、子どもの学習活動を組織し、子ども自身が成し遂げた学習の成果として知識や技能を定着させていくために、教員や保育者がどんなに苦心しているのかに注目するという見方を持つことが必要だと感じる。

夏季研修で取り扱う自然体験、集団宿泊体験についても同様のことが当てはまる。むしろ園や学校の外に出かける活動であればこそ、活動における安全への配慮、また食事や入浴、睡眠といった学生自身の生活を保証する最低限の必要を満たすために、ルールやマナーを重視することなど、教員や保育者が気遣わねばならないことは日常の活動をはるかに超えている。だからこそ、各プログラム（表1）の内容はもちろん、研修を通じての学生同士のやり取り、スタッフであり経験者でもある上級生（以下、「学生スタッフ」と記載）との関係、そして本学教員とのコミュニケーションなどの中に、教える立場から見た活動の意義が学ばれるべき切実さをもって、学生たちの前に立ち現れてくるのだと考えられる。さらに学生たちにとっては、教員や保育者としての自分の将来の可能性と向き合う初めての機会にもなるわけで、楽しいだけではすまされない厳しさも備えていることになる。

夏季研修実施のねらいは、次の通りである。（学生配布の夏季研修しおりより転記）

- ① 園や学校で行われる宿泊体験や移動教室などの意義を幼児、児童を引率する視点から体験を通して学ぶ
- ② 学外に出かけ様々な体験を積み重ねる
- ③ 学生同士または学生と教職員とのコミュニケーションの機会を持ち、相互理解と社会性を養う

表1. 夏季研修プログラム

1日目 9月〇日	2日目 9月〇日	3日目 9月〇日
8:45 バス配車場所集合出発	6:30 起床・朝食	6:00 起床
12:00 昼食（滝沢牧場）	9:00~15:30	6:30 朝の集い・朝食
14:00 宿舎到着・入所式	清里ハイキング	8:30 荷物整理・室内清掃
14:45 工作（キャンドル作り）	15:30 自由時間・入浴	10:00 全体活動
16:30 自由時間・入浴	18:00 夕食	(夏季研修思い出シート作成)
18:00 夕食	19:30 キャンドルファイヤー	12:00 昼食・退所式
19:30 星座観察	21:00 就寝準備・就寝	13:20 宿舎出発
21:00 就寝準備・就寝		16:00 解散場所付近到着・解散

## 3. 活動内容と学生の学び

本学が東京都調布市に位置することから、調布市の施設である「八ヶ岳少年自然の家」を利用し、学生の夏

休みの間で2泊3日の研修を行った。主な研修内容は、工作・星座観察・ハイキング・キャンドルファイヤー・思い出シート作成等であり、様々な体験活動を取り入れた。ここでは、各体験活動での取り組みから見えてくる、学生の学びを整理する。

### 3-1 キャンドル作り

#### 1) 活動のねらいと学生の学びとの関係について

前期を終え入学して6ヶ月目となるが、学生同士が十分なコミュニケーションを図る機会は授業のリアクションペーパー等による記述から、授業の関わりだけでは難しい様子がうかがえた。一方で夏季研修の活動は1年生で構成された班での活動が主となった。この班の構成は学生任意ではないため、普段関わりのない学生同士が組んでいる可能性が高い。そしてキャンドル作りもこの班での活動となった。つまり、本活動は学生同士の関わりが手探りである1日目最初の活動となった。これらの背景を踏まえ、本活動のねらいは学生同士のコミュニケーションを深めるための協同的な班活動とした。キャンドルは2つ作り、どちらか1つはキャンドル塔に取り付け2日目夜のキャンドルファイヤーで火を灯すために使用することとした。

本活動の学生への提示をまとめると以下の通りとなる。

- ① クレヨンを削り、紙コップに入れる
- ② ①に溶かしたロウを入れて、かき混ぜ、キャンドルの芯を中心に入れる
- ③ 同様に2つ目のキャンドル作る(図1)

①~③のねらいとして、①はクレヨンの混色や削る分量によるロウと混ぜた時の色調について、②ではロウが固まるまでにクレヨンとロウをかき混ぜる時間や、硬化するまでに芯を入れるタイミングなどは実際のロウの状態から感覚で判断するものとなる。したがって①と②は正解が示されている活動ではなくそれぞれの活動によって仕上がりも異なる。そして③の活動でイメージしたキャンドルを作る際は1つ目の多様な作品の情報が班の中で共有され、協同的な活動が活発になると考えられる。



図1. 作成したキャンドル

#### 2) 取り組みの効果と今後に向けて

活動が開始されると学生スタッフに活動手順などを確認する学生の姿が見受けられた。しかし次第にクレヨンを削る時のカッターの使い方についてや備品の細かな使用手順の確認などを1年生同士で行うようになった。そして2つ目のキャンドル作りでは、色の多様化や色を分けて硬化させ1つのキャンドルを作るなど、1つ目のキャンドル作りの活動が貴重な情報源となり、個々の情報を共有する学び合いが行われた。この活動でコミュニケーションが活性化され、学生の振り返りの記述から班の結束が深まったと考えられる。

以上、振り返りの記述からキャンドル作りは、以降の班活動がスムーズに展開できるような影響を与え、さらに2日目夜のキャンドルファイヤーへの期待にも起因したと考えられる。このことから、夏季研修は個々の研修内容が独立した学びではなく2泊3日を通しての学びであることが示された。今後をもっと有意義にしているためには学生においても学びのつながりを感じ取ることができる工夫が重要であると考えている。

### 3-2 星座観察

#### 1) 活動のねらいと学生の学びとの関係について

星座観察は、2017(平成29)年の新学習指導要領(2020[平成32]年度全面実施)第4学年の内容B生命・地球(5)月と星に関わる活動であり、小学校理科解説では以下のように述べられている。

「ここでは、児童が、月や星の位置の変化や時間の経過に着目して、それらを関係付けて、月や星の特徴を調べる活動を通して、それらについての理解を図り、観察、実験などに関する技能を身に付けるとともに、主に既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想する力や主体的に問題解決しようとする態度を育

成することがねらいである。』<sup>5)</sup>

「ここでの指導に当たっては、移動教室や宿泊を伴う学習の機会を生かして、実際に月や星を観察する機会を多くもつようにし、夜空に輝く無数の星に対する豊かな心情と天体に対する興味・関心をもつようにする。』<sup>5)</sup>

新学習指導要領の趣旨を踏まえ、教員を目指す学生に実際に星空の観察をさせ、天体の美しさを感じ取る体験をさせることには、天体に対する興味・関心を高めるといった大きな意義があると考えられる。学生は、保育園、幼稚園、小学校と、その職種によって、将来対象にする子どもの年齢は異なるが、現場に出た後は、それぞれの発達段階に合った指導をすることになる。その指導者自身が直接体験することにより得た知識・技能や心情は、自然の素晴らしさを伝えられる力になると考える。学生自身が実体験から感動し、天体への興味・関心を高めることによって、より実感のこもった指導ができるようになると思われる。

また、学習を的確に進めるためには、観察技能も大切である。そのため夏季研修では、小学校で学習した内容の復習の意味も含め、プログラムに星座早見盤の使い方実習、星座の基礎知識の指導も盛り込んで実施した。学生一人一人に星座早見盤を用意し、自分で操作し観察する機会を設定した。自ら星座早見盤を操作することで、子どもたちに自信をもって指導できるようになると考える。

## 2) 取り組みの効果と今後に向けて

体育館での事前指導後、屋外での観察体験を行った(図2)。「月と星」の学習は、小学校の学習内容であるが、夜間の観察であるため、外出できなかつたり、夜空が明るく観察できなかつたりするため、十分な学習がされていない実態がある。そのため、流れ星を生まれて初めて見たという学生も数多くいた。教師となる学生自身が感動し、自然の素晴らしさを感じ取る体験は、机上の学習だけでは決して実現できないものである。この取り組みは、生きた学習として非常に価値があったと考える。今回は星に関してだけの実習であったが、方位磁針の使い方や月の動きに関する内容を盛り込む事も考えられる。幼児教育コースと児童教育コースの学生がいるが、指導者として天体に興味・関心をもつ上では効果が期待される。



図2. 屋外で星座観察

## 3-3 ハイキング

### 1) 活動のねらいと学生の学びとの関係について

ハイキングは宿舎周辺のエリア(約8km)で行い、約5時間のプログラムであった。この活動では班員と協力しながら、清里の自然を満喫することを主なねらいとした。2班合同(10名程度)で移動することで、班内での協力が促されるようにした。また、ゴールを目指して歩くだけでなく、清里の自然や生き物に関する興味・関心を持つきっかけづくりとして、ネイチャーゲーム<sup>(1)</sup>の「フィールドビンゴ」を参考に、花や虫、自然の中にある形、匂いなどを探す自然観察ビンゴを取り入れた(図3)。コースの途中では清里に多く生息するやまねをテーマにした「やまねミュージアム」を訪れ、館内のクイズラリーにも参加した。



図3. 自然観察ビンゴ

このような自然とかわる活動は、幼児教育では主に領域「環境」、小学校教育では「生活科」や「理科」との関連が深い。対象に応じて実施する内容は異なることが予想されるが、いずれにおいても自然に直接接触したり、観察したりする活動を通して、自然の美しさや不思議さに気づいたり、動植物などの違いや特徴を見付けたりすることに繋がるといえる点では共通しており、学生にとって将来役立つ学びになると考えられる。さらに、教員・保育者として運営する時のことを考え、本学教員によるコースの下見状況を伝えたり、スタート前に服

(1) ジョセフ・コーネルによって発表された五感を使って自然を直接体験するプログラムであり、「自然への気づき」を目的とし、環境教育にもつながる活動である。

装や持ち物の確認をしたり、各ポイントに本学教員や学生スタッフが立ち、班員の様子や通過時間を確認するなど学生が安全管理に関する留意点にも気づけるように配慮した。

## 2) 取り組みの効果と今後に向けて

振り返りの記述から、学生たちは地図を見ながら進むことに不安を感じつつも、班員と協力してゴールした時に大きな達成感を得た様子が見えられた。また、「自然観察ビンゴを取り入れたことにより、山道も楽しみながら歩くことができ、日ごろは目が留まらないような自然にも気づくことができた。」「子どもたちが自然の中で充実した活動するためには安全面への配慮が欠かせないことを学んだ。」という記述がみられ、教員・保育者として必要な視点を学ぶことができたものと考えられる。学生たちの会話を踏まえると、ハイキングは体力的な負担もあり敬遠する者も多かったようだが、楽しく取り組める工夫を盛り込むことで、自然への気づきや班員との協力などを体験できる有意義な活動になったと考えられる。また、ハイキング中の様子を班ごとに撮影(図4)し、3日目の思い出シートに活用することでハイキングでの振り返りにも繋がった。今後もプログラム間での連携を図りながら進めていきたい。



図4. 高原を歩く様子

## 3-4 キャンドルファイヤー

### 1) 活動のねらいと学生の学びとの関係について

保育現場のお泊まり保育、小学校の臨海学校等において、キャンプファイヤーやキャンドルファイヤーを夜のプログラムとして取り入れている場合がある。この夏季研修では、2日目の夜にキャンドルファイヤーを行った。2017(平成29)年に公示された小学校・中学校の指導要領の改善事項として、生命の有限性や自然の大切さ、挑戦や他者との協働の重要性を実感するために体験活動の充実を挙げている<sup>6)</sup>。活動の意図は、「火」という自然を囲みながら、同じ空間で仲間と楽しんで活動する中で、非日常を味わうことを体感し、今後、指導や援助していくための教員・保育者の役割を感じ取ることである。今回、この活動プログラム(表2)は、学生スタッフ10名と教員が話し合い、1年生の学生が同じ空間や時間を有意義に過ごすことができ、夏季研修参加の満足感を味わうことができるよう、学生スタッフたちが昨年の自らの夏季研修の経験をもとに立てたものである。

表2. キャンドルファイヤープログラム

時間	流れ
19:20	・学生 入場 ・キャンドル点火 ・火の使い 登場 ・火の使い 退場
19:35	「燃えろよ燃えろ」「大きな歌」
19:45	「森のくまさん」「ドレミのうた」
19:50	星座集まりゲーム
20:10	ブラックパネルシアター —どこでねるの—
20:25	「友だちになるために」
20:40	静かに退場・終了



図5. キャンドルファイヤー中の様子

プログラムの構成は、静・動・静を意識し構成されている(図5はキャンドルファイヤー中の様子である)。一人ひとりの声が集まる快感、友だちと一緒に動く面白さ、普段とは違う雰囲気での教員の姿、学生スタッフの姿など、1年生にとって様々な思いを抱くようなプログラムを計画した(図5)。

学生の学びとして、一緒に歌う楽しさや動く面白さを体感することを通して、子どもの気持ちを味わい、自分の目指す教員・保育者像の確立に活かすことが挙げられる。学生スタッフの動きなどを通して、プログラムの進行の大切さ、人前で堂々と振舞うことの重要性も感じ取ることができると思う。

## 2) 取り組みの効果と今後に向けて

このキャンドルファイヤーでは、1日目に一人ひとり作成したキャンドルを取り付けた巨大なキャンドルの塔を中央に飾った。各班長14名が代表で火を灯したキャンドルは、暗闇で幻想的な空間を作り出した(図6)。振り返りの記述から、学生一人ひとりが作ったキャンドルを灯すことで、キャンドルファイヤーに対しての期待が高まったことが挙げられた。大きな声で歌ったり、歌いながら体を動かす時には隣の友だちと手をつないだりと体育館の中が一つにまとまったという記述も見られた。学生スタッフも雰囲気明るく盛り上げ、歌う先輩の姿を見て、憧れの気持ちを抱いたという感想もあった。今後に向け、企画や計画作成、準備なども学生スタッフだけで進めることができれば、自身の学びの効果も学生スタッフは実感できたのではないかと考える。しかし、学生スタッフは一同に集まった仲間に対して指導する経験が少なく、また夏季研修までの準備期間が限られているため、教員と共に計画を立て実行していくことが現時点では最善だと考えられる。



図6. キャンドルの塔

## 3-5 朝の集い

### 1) 活動のねらいと学生の学びとの関係について

研修3日目、豊かな自然の中で過ごしてきた研修最終日の始めの活動として朝の集いを行った。朝の集いは、清々しい高原の空気に触れ、1日の始まりとして心身の状態を整え、その日の活動を確認し見通しをもつために行うものである。この研修では、子どもたちにとっての意義を確認し、その活動例を体験する観点から、3日目の朝に朝の集いを予定し、その内容と進行を3名の教員が計画して実施した。学生は、主な内容として、班毎の集合や朝の挨拶と健康観察はもちろんのこと、教員の役割分担による、①頭を使った「知」の活動、②体を使った「動」の活動、③呼吸を使った「心」の活動の3つを体験した。

### 2) 取り組みの効果と今後に向けて

①の頭を使った「知」の活動では、「スーパーじゃんけん」と称するじゃんけんゲームを行った。このゲームでは、グー(石)、チョキ(鋏)、パー(紙)の3つに加えて、「スーパー・コンちゃん(狐の形をつくる)」と「幸せの鳥(親指を交差させ、両手で鳥の形をつくる)」の2つを加えて、じゃんけんを行った。「スーパー・コンちゃん」はグー・チョキ・パーの全てに勝てるが、「幸せの鳥」には負けてしまう。「幸せの鳥」は「スーパー・コンちゃん」には勝てるが、グー・チョキ・パーには負けてしまう。勝つためにはよく考える必要があるため、勝つ時には学生たちも歓声を上げながら取り組んでいた。

②の体を使った「動」の活動ではラジオ体操を行った。はじめに学生は教員から「体操を子どもたちの前に立って示範する場合は、指示する声と左右を逆にして体を動かす」という説明を受けたので、教員・保育者は子どもに正対した動きを意図的にしていることに気づく機会となった(図7)。

③の呼吸を使った「心」では、臨床心理学が専門の教員から「怒り」を沈めて冷静に対処するための呼吸法の紹介があり、その呼吸法を体験した。

子どもたちと集団で行う楽しく簡単なゲーム感覚のアクティビティや体調を整えるための軽い運動、さらには心の安定を図るための呼吸法等、簡単な技法の例を知る機会を設けることで、学生にとってこのような活動を行う意味について実感を伴って理解することができる機会となったことが振り返りの記述にも記されていた。今後、学生たち自身がこのような活動について関心を持ち、さらに多くのアクティビティや技法を自ら調べて身につけていこうとするきっかけとなっていくことが期待される。



図7. ラジオ体操を行う

### 3-6 思い出シート作成

思い出シート作成とは3日間の活動を振り返り、A3用紙にまとめる活動である。まとめの形式は自由とし、マーカーペンや色紙、班で3日間の記録として撮影した写真などを使用し構成していくこととした。

#### 1) 活動のねらいと学生の学びとの関係について

活動のねらいは、①振り返ることで学びに気付く、②体験した学びを可視化する、③班の学びを伝える、の3つである。体験型の研修活動は知識や机上では学べない実体験を得ることができる良さもあるが、一方で何を感じたのか、何を学んだのかについて具体的な記録が残りにくいいため学生自身も学びの自覚が難しい活動である。そこで3日間の記録を思い出シートとして作成することで班の学びを振り返ることとした。3日間の活動を整理しまとめ、学びを可視化し、学生が学びを自覚することを活動のねらいとして設定した。また、まとめ方は自由形式であるが、学生には第三者に学びが伝わる工夫を心掛けるよう事前に教員が説明をした。これは実際の教育、保育現場において保護者対応や研究発表などで必要となる、伝えることの実践的なスキルであると考えているからである。思い出シートのテーマについて、3日間のことを書くのか、一つの活動を深めて書くのか、時系列を追って書くのか等の提案を事前に教員が行った(図8)。



図8. 思い出シート作成時、教員が提案している場面

#### 2) 取り組みの効果と今後に向けて

まとめた内容は1日目の滝沢牧場での動物のふれあいや2日目のキャンドルファイヤーの活動の学びを示したシートやハイキングで気付きや体験をまとめたシート、星座観察の学びを中心にまとめたシートなど各班でそれぞれの視点と学びが可視化されたものとなった。また、班の考察、思い出シートの作成のきっかけに有効に作用した素材が3日間を記録として撮影した写真である。この取り組みは研修活動当初から行われており、各班でカメラを1台支給し撮影していた。2018年度の研修では、各自のスマートフォンで撮影し、そのデータを班で共有し2日目夜までにその中から8枚を決め、そのデータを教員が印刷した。このようなメディア活用は今回初の試みであったが、SNSが普及しているように学生はこのようなメディア活用を日常として関わっている。教員がこのような学生の動向や感覚に対応できる柔軟性や視座を持ち、教育・保育現場において保護者対応や研究発表などで活用していく指導をすることで、学生のメディア活用は実践的なスキルとして生かすことができる。

## 4. 学生の学びの姿から読み取れること

各活動を通しての学生の振り返りの記述から見られた感想の一部を挙げる。

- 星座観察では、ただ星を観るだけでなく、今、観ることができる星の情報や星座にまつわる話を伝えていきたい。
- 都会では味わうことができない星空は、観る人に感動を与え、子どもにも自然の美しさや素晴らしさが伝わると思う。
- いつもだったら気にしないような草や花の色・感触・においにも気をつけて歩くことができ、子どもたちの目線でも楽しむことができ、発見もあった。
- ハイキングなどは、グループで行動を共にすることで、仲間意識が生まれ、辛い時でも励ましあえると思った。
- キャンドルファイヤーは、とても幻想的で日常から離れ、自分自身と向き合えた。

活動を終えた学生の振り返りから、非日常を味わう中で新たな発見をした素直な感想が読み取れ、教員・保

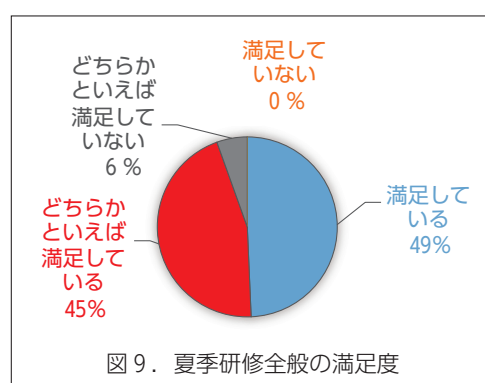
育者としての視点から指導や援助の仕方について考えた様子を伺うことができた。「教員・保育者の視点を意識したことにより、今まで気づかなかったプログラムの意図や安全管理、教員の関わり方などにも注目できた」という感想もあり、体験活動を通して、学生自身が様々なことを感じ取り、自らの学びにつなげていったことが読み取れた。

## 5. 学生アンケート分析と考察

夏季研修後、2018年度の研修に参加した1年生73名に「夏季研修に関する調査」を実施し、夏季研修全般の満足度および経験できて良かったと感じたプログラム（複数回答）、またそれらの理由について回答を求めた。実施にあたり、回答は成績に影響しないこと、回答しにくい項目に無理に回答しなくてもよいことを口頭と紙面にて伝えた。

### 5-1 夏季研修全般の満足度とその理由

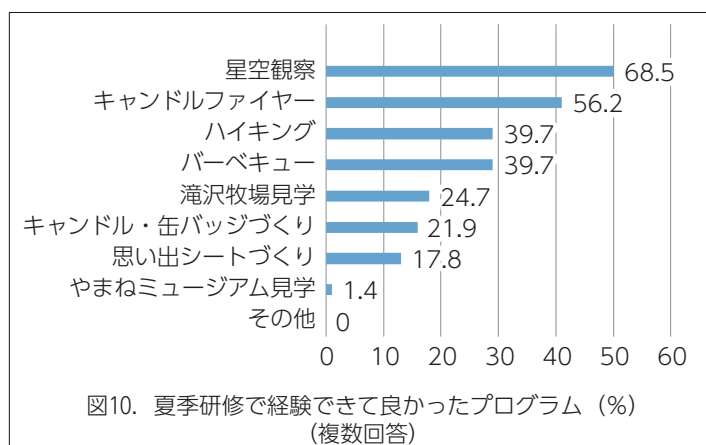
2018年度夏季研修全般に対して、36名（49.3%）が「満足している」、33名（45.2%）が「どちらかといえば満足している」、4名（5.5%）が「どちらかといえば満足していない」と回答しており、1年生約95%の学生が今回の夏季研修に対して満足していることが分かった。「満足していない」と回答した学生はいなかった（図9）。



満足度についての理由として大きくは2つ挙げられており、「仲間との繋がり」と「学び」についてであった。「仲間との繋がり」について言及した自由記述を見ると、他コース学生や大学においては話をしない学生と知り合う機会となった、友達をさらに深く知る機会となった、仲間と協力することの大切さを感じたなどが主であった。また、「学び」について言及した自由記述として、将来にも役立つ保育や教育に関する学習が出来た、現場での出来事などを教員から聞くことが出来た、指導者側の視点に立って活動することが出来たなどの意見があげられていた。この「仲間との繋がり」と「学び」のどちらも、学生任意でない班構成やプログラム実施者の教員と共に活動する今回の研修がもたらした成果であると考えられた。

### 5-2 夏季研修で良かったプログラムとその理由

夏季研修のプログラムの中で経験できて良かったと感じたものは、「星空観察」が50名（68.5%）と最も多く、次いで「キャンドルファイヤー」41名（56.2%）であった。「バーベキュー」、「ハイキング」はともに29名（39.7%）、「滝沢牧場見学」18名（24.7%）、「キャンドル・缶バッジづくり」16名（21.9%）、「思い出シートづくり」13名（17.8%）、「やまねミュージアム見学」1名（1.4%）、その他0名であった（図10）。



プログラムが良かったとした理由の自由記述を見ると、満足度の理由にあげられていた非日常的環境における経験について、より具体的な記載が見られた他、運動が苦手な疲れもあったが、歩き切った達成感、「キャンドル・缶バッジづくり」で自分が作成した物が使われたキャンドルファイヤー等、プログラム評価に自我関与がかわっていることが推察された。また、夏



季研修の満足度および良かったプログラムの自由回答の記述には、活動の準備に携わった先輩学生や教員の存在への気づきも見られ、視野の広がり、他者への感謝の気持ちを述べる学生もあった。

## 6. まとめ・今後に向けて

本稿では、夏季研修における取り組みの効果とそれぞれの活動を通しての学生の学びの整理、学生アンケートの分析を行った。様々な体験活動から学生が何を学び、それが学生自身の「学びに向かう力」の向上、そして教員・保育者の資質向上にどのようにつながるのかを検討した。結果、それぞれの活動の意図を学生に伝えていくことの重要性が表された。学生自身の「学びに向かう力」の向上、教員・保育者の資質向上へのつながりに関しては、夏季研修で多くの体験を積んだ学生が、残りの大学生活で、どのように自らの資質向上に活かしていくのか継続して見ていくことが課題となった。

夏季研修のねらいの一つでもある「宿泊体験や移動教室などの意義を幼児、児童を引率する視点から体験を通して学ぶ」ということに関してアンケート調査や自由記述の感想からは、学生が活動のねらいを感じながら過ごしていた姿が読み取ることができた。また「様々な体験を積み重ねる」というねらいについては、非日常的環境に自ら主体的に関わることで、達成感や満足感を多く味わった姿がアンケート調査の結果からも導き出された。「学生同士または学生と教員とのコミュニケーションの機会を持ち、相互理解と社会性を養う」というねらいでは、2泊3日という限られた日数での活動だったため、学生全員が全教員とコミュニケーションを十分に取れたとはいえないだろう。今後の課題として、この夏季研修をきっかけに、大学での授業などでの教員とのつながりをより深めていくことがあげられるだろう。

学習指導要領・幼稚園教育要領・保育所保育指針等が改訂され、子どもたちの「生きる力」を資質・能力で具体化し、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つが挙げられた。その中で「学びに向かう力」はやる気や協調性、コミュニケーション能力といった力を育むための教員や保育者の資質向上が近年求められている。やる気や協調性、コミュニケーション能力は、子どもたちが自ら主体的に行動し、様々な体験を積むことで得ていくものである。教員・保育者の資質向上に向けて、本学の夏季研修で得た学びを大いに活かしていくことを期待している。

## 引用・参考文献

- 1) 独立行政法人国立青少年教育振興機構「学校で自然体験活動をすすめるために」2010年
- 2) 独立行政法人国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動などに関する実態調査」報告書 2014年
- 3) 中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」2005年
- 4) 文部科学省 幼稚園教員の資質向上に関する調査協力者会議「幼稚園教員の資質向上について」2002年
- 5) 文部科学省 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 理科編』2018年
- 6) 文部科学省 初等中等教育局教育課程課「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の制定並びに幼稚園教育要領の全部を改正する告示、小学校学習指導要領の全部を改正する告示及び中学校学習指導要領の全部を改正する告示等の公示について（通知）」2017年

## 【英文要旨】

The three-day summer training program in Kiyosato is held for three consecutive years in order to provide learning opportunities through diverse experiences to all freshman students of the Department of Child Care and Primary Education, Faculty of Human Studies, Shirayuri University. It is expected that their abilities to teach and care for young children are developed through this program.

In this paper, we analyzed the contents of each program activity and conducted questionnaires to determine the level of student satisfaction with the program. We also examined whether specific experiences stimulated student learning and enhanced their motivation to learn more about teaching and caring for children.

We found that students participating in the program understood the viewpoints and recommendations of the nursery and primary teachers. They were very satisfied with their experiential learning and felt motivated to continue their studies in teaching and childcare. We also found additional methods to improve this program.